

世界の文學

—その鑑賞と理解のために—



ブ中將、大將に昇進

世
界
の
文
学

—その鑑賞と理解のために—

世 界 の 文 学

—その鑑賞と理解のために—

緒言

戦後、長らくとざされていた世界文学への眼を広く開くべく、世界文学辞典や世界の名作解題などの書物がしきりに若い人々から求められている。この書の編集者らも、その要望にこたえるために、すでに一度ならず、この種の試みに力をいたして来た。中部日本新聞社版「世界文学辞典」もその一つの企てであつたが、ここにさらに同社の求めに応じて、世界の名作中の名作といふべき作品のみをえらび、より詳細懇切に、それらの名作の鑑賞と解釈との、いわば決定版をつくるべく努力したのがこの書である。

編者らがこの書において特に意をそそいだのは次の諸点であつた。

一、記述の周到と徹底を期するため、掲載項目はあえて多きを求めず、いやしくも世界文学に關心する者の必読すべき名作大著と目すべきもの五十種をかぎり、しかもあえて本邦未訳のものを加えることを辞さなかつた。

一、それぞれの作につき、とくにその梗概をくわしく述べた上で解説をすすめ、さらに作者の生涯と他の諸作品について述べて、全面的にその作を味解し評価しうるように留意し、終りにその作と作者とに關する参考文献の代表的なものを指示した。

一、執筆は各項目に最適と思われる第一線の、また気鋭の作家、批評家に依頼し、それぞれ責任をとつて文末に署名した。執筆担当者を列記すれば、編者らをつくめて、左の二十五名である。

荒 正人 伊藤 整 小川政恭 大田三郎 斎藤正直 佐々木基一
瀬沼茂樹 竜野咲人 田中西二郎 東宮 隆 中橋一夫 橋本福夫
早坂礼吾 原田義人 平井啓之 平田次三郎 藤原 定 堀田善衛
本多秋五 松村茂夫 矢内原伊作 山室 静 横田瑞穂 吉村博次
和久利誓一

はたして編集部に寄せられた原稿の出来ばえについては十分に近い満足をもつことができた。名作の解題、鑑賞の書物としては、この水準をぬくものは今後も当分出がたいのではないかと信じる。執筆者各位にあつく感謝するとともに、読者諸賢の心からの支持がえられるものと期待している。

一九五一年十一月

「世界の文学」編集者

伊 藤 整
本 多 秋 五
山 室 静

目次

| | |
|-------------------------------|-----|
| イリアス (ギリシア ホメーロス) | 一 |
| 神曲 (イタリア ダンテ) | 七 |
| ドン・キホーテ (スペイン セルヴァンテス) | 一五 |
| 源氏物語 (日本 紫式部) | 二二 |
| 紅楼夢 (中國 曹雪芹) | 二九 |
| オセロ (イギリス シェイクスピア) | 三七 |
| トム・ジョウンズ (イギリス フィールドイング) | 四四 |
| 嵐が丘 (イギリス エミリー・ブロンテ) | 五二 |
| デヴィッド・カッパフィールド (イギリス ディッケンズ) | 五九 |
| フロス河畔の水車場 (イギリス エリオット) | 六七 |
| エゴイスト (イギリス メレディス) | 七五 |
| ユリシイズ (イギリス ジョイス) | 八二 |
| チャタレイ夫人の恋人 (イギリス ロレンス) | 九二 |
| ポイント・カウンター・ポイント (イギリス ハックスリー) | 九七 |
| 饑餓 (フランス ルソオ) | 一〇四 |

| | | |
|-----------|--------------------|-----|
| 赤と黒 | (フランス スタンダール) | 一一一 |
| 谷間の百合 | (フランス パルザック) | 一一九 |
| 悪の華 | (フランス ボオドレエル) | 一二七 |
| レ・ミゼラブル | (フランス ユゴー) | 一三五 |
| 感情教育 | (フランス フロオベール) | 一四一 |
| 女の一生 | (フランス モーパッサン) | 一四九 |
| ジェルミナール | (フランス エミール・ゾラ) | 一五七 |
| 未来のイヴ | (フランス リラダン) | 一六四 |
| 贖金づくり | (フランス ジード) | 一七一 |
| 失われた時を求めて | (フランス プルースト) | 一七九 |
| 魅せられたる魂 | (フランス ロマン・ロラン) | 一八七 |
| 人間の条件 | (フランス マルロオ) | 一九六 |
| チボー家の人々 | (フランス マルタン・ジュ・ガール) | 二〇三 |
| 自由への道 | (フランス サルトル) | 二一〇 |
| 青い花 | (ドイツ ノヴァーリス) | 二一七 |
| ファウスト | (ドイツ ゲーテ) | 二二五 |
| マルテの手記 | (ドイツ リルケ) | 二三二 |
| 城 | (ドイツ カフカ) | 二三九 |

| | | |
|-------------|-----------------|-----|
| ヨゼフ物語 | (ドイツ トーマス・マン) | 二四七 |
| 硝子玉遊戯 | (ドイツ ヘルマン・ヘッセ) | 二五四 |
| ブランドン | (ノルウェー イブセン) | 二六一 |
| クリスチン物語 | (ノルウェー ウンセツト) | 二六九 |
| ダマスクスへ | (スエーデン ストリンドベリ) | 二七五 |
| 死せる魂 | (ロシア ゴーゴリ) | 二八三 |
| 父と子 | (ロシア ツルゲーネフ) | 二九〇 |
| アンナ・カレーニナ | (ロシア レフ・トルストイ) | 二九八 |
| カラマゾフの兄弟 | (ロシア ドストエフスキー) | 三〇七 |
| 三人姉妹 | (ロシア チェーホフ) | 三一五 |
| クリム・サムギンの生涯 | (ロシア ゴーリキイ) | 三二二 |
| 静かなドン | (ロシア ショーロホフ) | 三二九 |
| 白鯨 | (アメリカ メルヴィル) | 三三六 |
| アメリカの悲劇 | (アメリカ ドライザ) | 三四四 |
| 風と共に去りぬ | (アメリカ ミッチェル) | 三五二 |
| アメリカ合衆国 | (アメリカ ドス・パソス) | 三五九 |
| 怒りの葡萄 | (アメリカ スタインベック) | 三六六 |

イリアス

原名 Ilias

紀元前 七〇〇年頃作

作者 ホメーロス Homeros B. C. 700頃

【梗概】「ペレウスの子アキレウスの怒りの話しを、女神よ、お聞かせ下さい、あの詛わしい怒りを。それは数知れぬ苦しみをアカイアびとら(の軍隊)に与え、幾多の勇士の逞しい魂をハデス(冥府)へ送り、彼等のからだを犬や禽鳥の餌食にしました。こうしてゼウス(オリシヤの神)の神意が遂げられて行きました。さあ、始めて下さい、そもその初め二人の勇士が——万軍の総帥アトレウスの子(アガメ)と神の如きアキレウスとが——争つたあげく別れたあのくだりから。」こう詩人は詩神ムーサに呼びかけた後、トロイア戦争におけるアキレウスの怒りを主題とした物語りをはじめ。先ず、ギリシヤ軍の総帥アガメムノンと弟メネラオスをはじめ全軍のところへ、クリュセの町のアポロンの神官が、掠奪されてアガメムノンのものとなつた娘の返還を要求しに来る。アガメムノンは怒つて追い返す。するとアポロン神の怒りにより、悪疫が起つて次々と兵士たちが

死んで行く。アキレウスが全軍の会議を開くと、席上予言者カルカスの口から今の禍いの原因が語られ、アガメムノンは神官の娘を返して兵士の滅亡を助けねばならなくなる。彼は代償としてアキレウスの得た娘ブリセイスを取つて自分のものとする主張する。両将のはげしい口論。アキレウスは劍を抜きにかかるが、アテネ女神が彼だけに姿を現わして制する。更に激論した後、別れて銘々自分のテントに帰る。アガメムノンの使者が来て娘を連れて行く。アキレウスは海辺に坐り、涙ながらに葡萄酒いろの海の面を見ながら両手をさしのべ、海底の女神、母なるテティスに訴える。銀色の足もて女神が浮び上つてわが子を愛撫する。母と子の対話。その結果、アキレウスは戦いに出ることをやめ、自分のテントで豎琴や競技で自らを慰めている。母はオリュンポスなるゼウスのところへ登り、ゼウスの膝にすがり願に手をかけて哀願する。アキレウスに名譽を与え、アガメムノンをこらしめるため、敵トロイア方に味方してギリシヤ軍が灣に曳上げてある船隊のところまで追いつめられ滅んでゆくようにして下さいと。遂にゼウスは承諾する。すると馥郁たる髪の毛が不死なる王(ポセイドン)の頭から被打ち垂れ、高くそびえるオリュンポスがぐらぐらと揺れる。二神は別れる。ゼウスの妻ヘラが嫉妬して夫を責めて口論となるが、ゼウスは威力でおさえつける。今後ヘラは

機会あるごとにギリシャ軍に助力することになる。

いつたいトロイア戦争は、トロイアの王プリアモスの子アレキサンドロスが、曾てスペルタの王メネラオスの許を訪れたとき、その妻ヘレネと恋におちて二人でトロイアへ逃げ帰つたことに起因し、かくてギリシヤ方はミューケナイの王アガメムノンを総帥としてギリシヤ各地の王たちが大船団をひきいてトロイアに攻めよせ、都を囲んだのであつた。そして戦いはもはや十年目に入つており、これまでアキレウス一人のために圧迫されつづけて来たトロイア方は、いまやこの両将の争いを機会に大反撃に出るのであつた。さて両軍はいよいよ進みより、その間が迫つたとき、トロイア方の陣頭に、姿よきアレキサンドロスが現れる。彼は青銅の穂先の二本の槍をふるいつつ、アルゴスびとら(ギリシヤ軍)のすべての将に一騎打ちを挑む。それをアレク(トロイア軍)の寵児メネラオスが見つける。「見よ陣列の真先に歩取り大きく進んで来ます。メネラオスは喜びました、獅子のよろに——。角ある鹿や野に棲む山羊の大きいなる死屍を飢えた獅子が見つけると、たとえ足疾とき犬どもと逞しき若者どもが追つて来ようとも、ひるまず貪り喰うように、メネラオスは姿よきアレキサンドロスをその目で見たとき喜びました、不倫の仇を酬いんものと。忽ち彼は物具を身に戦車から地に跳び下りました。彼が陣頭に現れたのを認める

や、姿よきアレキサンドロスは愕然と胸を打たれて、味方の隊伍の中へ、死を免れようと、退きました。あだかも人が山の谷間で蛇に出あい、背中を向けてたじたじとなり、手足は慄え、頬は蒼ざめ、もと来た方へ退くように。」するとその卑怯さを総大将ヘクトルになじられて、彼はメネラオスとの一騎打ちによつて両軍の勝負を決しようと提案する。両軍ともに喜ぶ。トロイアの城壁には老王プリアモスをはじめ元老達、それからメネラオスの以前の妻、美しいヘレネが登つて観戦する。さて、アレキサンドロスが敗れたと見えたとき、女神アフロディテが雲で蔽つて救い出す。オリュンポスの神々は戦いを続ける決議をし、トロイア方のリュカオンをそそのかしてメネラオス目がけ不意に弓を射させる。メネラオスの負傷をきつかけに両軍の激戦となる。ギリシヤ方の猛将ディオメデスが奮戦して敵を続と倒す。リュカオンの放つた矢が彼をきずつけるが、女神アテネの守護によつて元気づき、一層荒れ狂つて、敵に味方せるアフロディテの手首を槍で突いてオリュンポスへ追い払う。彼のためトロイア方の多くの将兵が傷ついたり倒れたりして凄惨をきわめる。こうして遂にギリシヤ勢が優勢となる。そこでヘクトルは独りトロイアの町へ引き返し、婦女子に命じてアクトロポリス(町の最高の間、ここに守護神アテネの神殿がある)へ行つて女神の神像に供え物をして祈ることを命じる。それか

ら彼は、弟のアレキサンドロスの家立ち密つて彼を責め且つ戰場へとうながし、次に妻アンドロマケと幼児のアステュアナクスとに城門のほとりで別れを惜しむ。こうしてヘクトルとアレキサンドロスの兄弟は戰場へ急ぐ。戦いはひとしお酷となり、ついにギリシヤ軍は浜辺まで追いつめられる。

アガメムノンは老将ネストルの進言でオデュッセウスその他のをアキレウスのテントへ派遣し、怒りを鎮め味方を救うよう懇願するが、彼は頑として聞きいれない。戦いはますます不利となり、ヘクトルが船に火を放たんばかりになる。けれどもゼウスはギリシヤ軍の完全な滅亡を欲せず、ヘクトルその他に船に火をつけさせない。さて、ここにアキレウスの親しい友であり従者であるパトロクロスがある。彼は心配にたえず、アキレウスに涙をもつて懇願し、アキレウスの甲冑を借り受けて戰場に現れる。敵軍は崩壊する。彼はアキレウスの忠告を忘れて深入りしすぎる。そうして遂にアポロシ神とヘクトルによつて殺されてしまう。ヘクトルはその甲冑を剥ぎとり、更に屍体をも持つて行くこうとする。屍体をめぐり激しい争奪戦が展開される。

(剥した敵の甲冑を剥ぎとること、屍体を破)
辱し、大やぶの罪にすることが風習であつた)

アキレウスは友の戦死をきいて、髪の毛をかきむしり、胸を打ち、のたうちまわつて号泣する。が、ついに彼は厭

イリアス

起する。母テティスの勧めで、彼は友の仇を討つためにアガメムノンと和解し、母は鍛冶の神を訪れてわが子のため武器を造つてもらふ。その楯は特に有名なもの。こうしてアキレウスはパトロクロスの屍体を奪い返し、新しい物具で身を固めて奮戦する。彼は敵を圧迫し、スカマンドロスの河の流れに追い落して斬り殺す。敵はついにトロイアの城門の内に逃げ込んでしまう。

が、ヘクトルはただ独り、西門の前に踏みとどまつて待ちかまえる。壁上には老王ブリアモスと母ヘカペーとがこもこもわが子に哀願して逃げ込んでくれと頼むけれども聞きいれない。「彼は毅然と前つてアキレウスの巨軀の近づくのを待つています。さながら一匹の山蛇が洞穴の前で人を待ち受けるとき、毒ある草を求め食み、身の内に宿り入つた敵愾心もの凄く、ぎらぎらと光る眼で辺りを睨めて洞のほとりに蟠る。このようにヘクトルは闘志満々たじろがず、壘壁の突角に輝く盾を支えています。佛然と、彼はわれとわが心に向つていきました。「おお、この己は、もし己が門をくぐつて中に入つたら、先ず責めるのはブリーリュダマスだ。アキレウスが騒起した呪わしい昨夜の中に、彼はトロイア勢を町へ率いて帰ることを勧めてくれた。だが己は聞かなかつた。その方がはるか有利であつたであろうに。だが、己の無謀によつて多くの部下を殺したのだ。ト

ロイアの男らと裳裾曳く女らが憚られる。己よりも劣る誰かがいふだろう。ヘクトルは自らの力を恃んで部下を殺したと。そのくらいならいつそのこと、アキレウスを討取り生還するか、さもなくば、彼の手にかかつて町の前に死華を咲かせるかだ……」思ひめぐらしつつ待つうちに、はやアキレウスは間近く迫り、見るからに兇輝くエニユアリオス(軍神)にまごうばかり。ペリオン山の凄じ槍を右肩の上(軍神)に揮いつつ、胸につけた青銅の鎧の光は燃ゆる焔か、さもなくば昇り来る日輪にまごうばかりに光つていました。それを認めたヘクトルは、にわかには慄えにおそわれて、もはやその場に甞りかね、門を後ろに逃げ出せば、ベレウスの子は猛然と、駿足にまかして追いかけます……」

神々が天秤に両雄の運命をのせて計るとヘクトルの方が傾いて彼の死が決定する。ヘクトルは三回町の周りを走つた後、甞つて敵を待ち構える。二人の会話。ヘクトル「もし己が勝つとしても、神々につけて、お前の屍体を凌辱せずには返してやる。お前もそうしてくれるだろうな。」アキレウスは断然拒絶する。やがて両雄の果し合いとなり、ヘクトルの投げた槍は相手の盾からはね返される。劔を振つておそいかかるが、アキレウスは彼の咽を槍で貫く。再び前と同様の会話。ヘクトルの息が絶え、アキレウスは物具を剥ぎ、裸の彼の踵に孔をあけ、紐をとおして戦車につなぎ

ひきずつて去つて行く。アキレウスの凱歌「いざ、アカイアびとらよ、勝利の歌を唱えつつ、凹形(くぼた)の船のかたえへ引きあげようよ、この敵を携(か)えて。打ちたおしたり剛の者へクトルを、トロイアびとらが都をあげて神と崇めし兵者を。」老王ブリアモスと母ヘカベエが壁上から狂気の如く喚く。妻アンドロマケエが走り出て来て、壁上から夫の引かれて行くのを認める。彼女の歎き。さて老王は、夜、馬車でアキレウスのテントを訪れる。アキレウスはさんざんにヘクトルの屍体を凌辱して殺されたパトロクロスの霊を慰めたのだが、まだ荒々しい怒りをもてあましていた。しかし、老王の懇願はついに彼を説き伏せる。アキレウスは身の代の贈物を容れ、屍体を返還する。あれほど凌辱された屍体であつたが、アポロンの神はみずみずしい綺麗な状態に保つて置いたのであつた。アキレウスの屍体は重い重に葬られ、トロイアびとらは都をあげて悲嘆にくれる。

【解説】アキレウスは二つの運命の中いづれかを拵(た)ばなければならぬ。もし勇敢に戦うならばトロイアの地で短命におわるであろう。が、その代り大きな名譽を得るだろう。戦いをするならば故郷に帰つて長生をするであろう。だが、平凡な一生をおくるであろう。彼は前者を拵ぶ。これがホメーロスの英雄の典型であり、トロイアの町の攻略という集団全員の協同行為の中へ英雄はとけこんで行く。そ

れが彼のよろこびなのである。しかも彼は集団に対して大きな影響力を有し、アガメムノンの侮辱にこたえる彼の行為はギリシヤ全軍の滅亡さえも招くことが出来る。このよ
うな個性と個性、個性と集団との関係をもつ世界が叙事詩の生れる基礎であつた。ホメーロスの英雄達は現世の生活を最も愛する。たとえ日傭人夫としてでもよい、死なずに現世に、換言すれば人々の集団の一員として生きていたいというのが彼等の願ひであつた。集団を権力者が支配し、その命令にすべての人々が縛られ服従しなければならぬような社会には、叙事詩の生れる余地がない。そのような社会では、個性の自由な発達は望めず、歪められる。そして反抗できる者はまだましで、自己のうちに逃避したり自然や神を救いの主、慰めの主として求めなければならぬくなる。また芸術も逃避の場となり、その他様々な歪んだ様相を呈する。叙事詩的世界においては人々の活潑な活動そのものが詩となり、町も村も山河も海も皆あるがままに歌われ、それらの全体が歌われる。先に触れたアキレウスの盾の面の絵を見よう。そこには昔の自然の全体と、人々の営みの全体が描かれているではないか。太陽と月と星をちりばめた空と、陸と海とが中央の円の中に、その周囲には先ず第一の環には結婚式と裁判とが行われている一つの平和な町と、兵士を送り出して敵と交戦しているもう一つ

の町が、その外周りの第二の環には農村の春、夏、秋、冬の営みが、第三の環には牧畜の絵が——獅子に襲われた牛群、平和な羊群、舞踏の絵が——、第四の環にはオーケアノスの流れ(これは地の開闢をめぐり、これが川と考へられていた)がめぐらされている。アキレウスの盾は一つの典型であるが、この盾のようにホメーロスにはその世界の全体が隨所に散在的に歌われているのである。次に叙事詩を貫いているのは強い力の関係である。即ちトロイア町の攻略がギリシヤ軍の集団としての目的であり、そのことにより集団は富強となるであろう。またトロイア軍は滅亡を免れ、町と婦女子と財産を護ることを目的として戦つていることはいうまでもない。一は若々しくて興隆して行く民族、他はすでに榮えて衰亡に向いつつある民族、その衝突の力と力の関係が全巻を通読するうちに迫つて来る。それからもう一つの力は、アガメムノン対アキレウスの抗争に現れた活潑な個性と個性、個性と集団との関係である。そうして隨所に展開される人間のありのまままで歪められざる諸相こそは叙事詩の生命である。また更には野蠻な荒々しい衝動に対する高貴な性情の勝利——アキレウスがヘクトルの屍体を返還する場、アガメムノンがクリュセスの娘を返し、更にアキレウスにブリセイスを返す場など——にも大きな価値がある。

さて、『イリアス』は後で述べるオデュッセウスとともに

に後世に大きな影響を与えた。先ずローマではヴェルギリウスの『アイネイス』が両詩にならつてアイネイアスの漂泊とローマの建国の叙事詩をつくつた。またヨーロッパ殊にドイツの人文主義の文学に与えた影響は至大であるが、次にその現代的意義にふれよう。それはわれわれが叙事詩の可能な社会を建設すべき時にめぐりあつていゝところである。人が人に従属してその道具となることでは、個性はその生存と活動の意義を集団の中に求めることが出来ない。個性は自己の中へ、自然や神へ逃避したり歪められたりして自由なる発露を妨げられる。そこでは勤勞は苦痛であり、単に自己と家族との生存の手段にすぎない。あの世がしたわしくこの世は地獄である。このような社会では叙事詩は生れることが出来ない。

【作者】ホメーロスは『イリアス』と『オデュッセイア』の作者とされている。古代ギリシヤ人はこれを信じて疑わなかつた。ところが紀元前一五〇年頃兩詩の内容や言語の相違から、『イリアス』だけがホメーロスの作であるとする考えが起つた。しかし当時のホメーロス研究家のアリスタルコスが反駁したため、この問題はあまり論じられなくなり、『オデュッセイア』の方を晩年の作と考へて満足するようになった。さて、ホメーロスという人に関してはいろいろな伝説があるが、いずれも實在の人物の存在を証明

するものではない。ただ、共通の型にはまつてゐることが指摘できる。即ちラブソドイのやり方で遍歴する貧しい盲目の詩人である。古代にできた胸像もこの型にもとづいてゐる。さて、古代の人はホメーロスの詩を吟誦を聞くことによつて享受した。即ちラブソドイと称する職業的な叙事詩吟誦家があつて、いろいろな祭りや競技の集りでホメーロスその他の叙事詩を吟誦してきかせたのである。ラブソドイのうち、特にホメーロスを専門にやる者をホメリーダイの後の語の意と稱した。これは職業的組合のようなものであつたと思われる。ホメリーダイにより、ホメーロスの詩はギリシヤ各地にひろめられた。その顯著なものは、アテーナイで紀元前六世紀、法律によつて四年目毎のパナテーナイアの祭りに、ホメーロス全巻が幾人ものラブソドイによつて始めから終りまで吟誦されることになつたことである。紀元前五世紀の終りにはアテーナイの町では殆ど毎日ホメーロスの詩の吟誦を聞くことが出来たといふことである。さて、ホメーロスの詩が作られたとき文字で書かれたのか、それとも口伝であつたかといふ問題があるが、今はそれにはふれないこととし、ただ、アテーナイの僭主ペイシストラトス(紀元前五六一—五二七在位)がホメーロスの詩を現在の形に編集したことがキケロに見えることを述べるとどめよう。さて、次に『オデュッセイア』。これはトロイの陥落後、

ギリシヤの英雄達がそれぞれの故郷へ帰る途中の諸々の艱難辛苦のうち、オデュッセウスを主人公にした叙事詩である。彼は堅忍不拔で智慧が深く、どんな難局に処しても落胆せず、智慧をしぼつて切り抜ける。しかも冒険をいとわない進取の気性に富み、新しい経験を好む。この物語りは多分に空想的要素を含み、ギリシヤ人のまだ見ぬ諸外国への知識慾を表している。葡萄酒いろの海原で起る様々の冒険や経験、地中海の自然はわれわれを中に誘ひこみ、闊達な人間性の流露にとかしこむに充分である。

【参考】土井晩翠譯『イリアス』(昭和一五)『オデュッセイア』

(昭和一八)これは原典からの邦譯のうちで最も價值のあるものであらう。(現在口ごもりに三卷)しかし原詩のおもむきは譯者の個性と窮屈な詩型によつて損じられている。田中秀央・松浦嘉一譯『オデュッセイア』(昭和一四)は文學的價值が乏しい。田中秀央・越智譯

『イリアス』(昭和二四)これも同様。むしろ英譯をすすめたい。Lang, Leaf, and Meyers "Iliad." Butcher and Lang "Odyssey." 獨語では Voss の譯が十八世紀に大きな影響を與えたが、現代の譯としては Scheffer, Th. の兩詩の譯がすぐれている。次に Mathew Arnold, "On Translating Homer." は種々の譯を批評しながらホメーロスの詩の特質を捉え正しい譯はどうあるべきかを説いた名著である。また Hermann Grimm, "Ilias." は『イリアス』を第一歌から鑑賞を主

として自己の立場から縱横に論じたもので、教えられるところの多うものである。Thassilo von Scheffer, "Die Schönheit Homers." は學問的前提を去つてホメーロスの詩の特質を説いたよい入門書である。しかし「ホメーロス」への最良の導入書は人生そのもの、自然そのものである

小川政恭

神 曲

原名 La Divina Commedia 一三一二—一三二一年作
作者 ダンテ (Dante Alighieri, 1265—1321)

【梗概】『神曲』の構想が初めてダンテの靈感に触れたのは詩人三十五の時、一三〇〇年四月八日にあたる聖金曜日の前夜だつたと推定される。Nel mezzo del cammin di nostra vita / Miritovai per una selva oscura, / Che la dritta via era smarrita. (われ正路を失い、人生の旅の半ばにあたりて、とある暗き林のなかにありき) という有名な言葉をもつてこの詩篇が始められているのはそのためである。

「神曲」は「地獄」「煉獄」「天国」の三篇に分れ、「地獄」は三十四、「煉獄」と「天国」はそれぞれ三十三の歌 Canto から成っている。あわせて百歌というのは完全数である十の自乗が目ざされているわけである。行数にする「地獄」が四七二〇、「煉獄」は四七五五、「天国」が四七五八で、合計して一万四千二百三十三行を含むことになる。そしてこれらの全体を十一音綴三行からなるテルツァ・リツ Terza rima といわれる詩形が整然と支配している。

地獄 INFERNO — ダンテの計算に従えば人生七十年、その半ばに達した頃、詩人は正しい道を見失つて小暗い林の中へと迷いこむ。たまたまある丘の上に光のさしているのを見つけて進んでゆくと、豹と獅子と狼とに道をふさがれて進退きわまり、再びもとの林に戻ろうとする。そこへ日頃敬愛するローマの詩人ウイリッススが姿を現して彼に救いの道を示し、自ら導者となつて地獄・煉獄・天国の三界を巡歴することをすすめる。そこで彼はこのすぐれた詩人の霊に導かれて、まず地獄へと下つてゆくのである。

「われを過ぐれば憂いの都あり、われを過ぐれば永遠の悩みあり、われを過ぐれば滅びの民あり……」(四三)と書かれた地獄の門をくぐると、罪人たちの不気味な呻きやむせ

び声が旋風に吹上げられた砂のように聞えてくる。このあたりは生前怯懦であつた者たちの亡霊が群がっている。

やがて渡守カロンチェルキオのあやつる舟に乗つて三途アケロンの川を渡ると地獄の第一の圏チェルキオに着く。ここはリンボと呼ばれて、キリストを知らず、洗礼を受けなかつた人々がおとされるところである。ここにはホメーロスはじめギリシヤやローマの詩人学者達がいて、ウイリッスもその一人なのである。第二の圏は邪淫の罪を犯した者、第三の圏は飲食の慾にふけつた者、第四の圏は貪慾と浪費の罪を犯した者、第五の圏は忿怒と傲慢の罪を犯した者という風に、それぞれ生前に犯した罪の種類に応じて地獄の苦しみをうけている。第五の圏にはステイジエといわれる恐ろしい沼があつて、この沼の中にダイテという憎悪の城が聳えている。魔軍の妨害をしりぞけてその城門を入ると第六の圏であつてここは異端者がこらしめをうけるところである。第七の圏は三つの囚ジブネに分れていて、それぞれ他を虐げる者、自己を虐げる者、神を侮る者が罰せられる。第八の圏は十の靈ボルシヤに分れ、それらは鋼鉄の岩でできている斜面に散在している。ここでは女を誘惑した者、誤らう者、僧職モニア売買を行う者、占者、公金消費者、偽善者、盗人、偽りの謀をめぐらす者、争いのかもす者、詐欺を行う者などが苦しみをうけている。

第九の圏は地獄の最後の段階である。それは地球の中心であり、全宇宙の底であつて、従つて地球全体の重みが全部この上に集つてゐる。ここにカイナ、アンテロナ、トロ

マイア、ジウデッカと名づけられる四つの円に分れていて肉親を殺した者、郷党を売り渡した者、信義を裏切つた者、恩人に背いた者などが、涙や血潮までを凍らせる寒さの中で喘いでゐる。「ああ万の罪人にまさりて幸なく生れし民、語るも辛きところに甞る者らよ、汝等は世にて羊または山羊なりしならばなお善かりしなるべし」(三三三)と詩人も嘆いたように、ここは地上において最も重い罪を犯した者達が、想像を絶する程の苛烈な刑罰をうけるところである。この地獄の底には半身を氷の中に埋めてルチフェロという怪物が立つてゐる。神に背いたために地獄の底にとされた魔王ルチフェロは醜惡な三つの顔を持つてゐる。「彼は六つの眼にて泣き、涙と血の涎とは三つの頤を伝いて滴れり。また口ごとに一人の罪人を齒にて碎くこと麻梳器のごとく……」(三四三)この世にも恐ろしい形罰をうけてゐるのは、キリストを売つたイスカリオテのユダ、ローマ建設の英雄カエサルを暗殺したブルウトゥスとカシウスの三人である。

このようにして地獄におけるあらゆる苦難の様相を究めつくした二人の詩人は、魔王の毛にすがつて地球の中心を

越え、そこに通じている一筋の道を辿つて、「再びもろもろの星を見んとて」(三四二)やがて明るい世界へと登つてゆく……。

煉獄 PURGATORIO —— 北半球に深く漏斗状にうがたれてゐる地球の底をくぐつて、緩やかな坂道を登つてつた二人は、一つの丸い穴を抜けてついに広々とした明るい世界へ出る。そこは南半球の中心にあつていて、海原の中に、すべてのキリスト教徒が生前に犯した罪を浄めるための淨罪の山がそびえてゐる。これが煉獄である。煉獄は登るに従つて八つの環道コンニチエに分れてゐるが、その門をくぐる前の裾野のあたりには、悔いあらためることの遅かつた者たちがその罪を浄められるところがある。ここを過ぎて門に到るまでには三つの階段があつて、第一は白い大理石、第二はベルソの色よりも濃い藍を帯びた緑色の焼石、第三は血のように赤い斑岩によつて、それぞれできてゐる。これらを登りつめたところに金剛石の闕をおいた煉獄の門があつて、扉は金と銀の鍵で開けるようになってゐる。

門を入ると、第一の環は傲慢の罪を犯した者が浄められるところ、第二の環は嫉妬の罪、第三の環は忿怒の罪、第四の環は怠惰の罪、第五の環は貪慾の罪がそれぞれ浄められるところである。二人が第五の環を歩いてゐると突然裏